

担当部局

生活造形学専攻

評価項目 1	（ア）体系的な履修を促す科目編成となっているか （イ）開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）家政学研究科生活造形学専攻では、「教育課程編成・実施の方針」に基づき、以下のように教育課程を体系的に編成・実施している。開講科目数については、以下の3研究領域を擁するため、2019年度から2021年度にかけては55-57科目と、やや多めに推移している。生活造形学専攻では家政学の視点から、造形意匠(デザイン)学、アパレル造形学、空間造形学の3研究領域における基礎的・先進的な専門知識・技能を修得するための講義科目群だけでなく、それぞれの専門領域において演習や課題研究など、コースワークとリサーチワークが適切に配置され、研究指導と論文作成指導を行っている。

（イ）家政学研究科生活造形学専攻専門科目における非常勤比率は、2019-2020年度において3%台であり、2科目を除き専任教員が担当している。非常勤担当科目については、「生活造形学特別講義 A」「生活造形学特別講義 B」である。これらの科目は、3研究領域からそれぞれ著名人を招聘し、隔年で A および B をオムニバス形式で実施しているものである。学生が先行する研究領域のみならず、他領域の研究分野を学ぶことにより、より広い視野をもつことを目的として、設置されたものである。

履修登録者数は科目ごとに異なるが、1～5名と少人数クラスとなっており、綿密な履修指導が行われており、開講科目数は適正であるといえる。

【成果が上がっている点】

（ア）院生が各自の専門領域のみでなく、生活造形学に関する広い視野をもつことを目的として、非常勤講師による「生活造形学特別講義 A および B」を設置している。

（イ）特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

担当部局

生活造形学専攻

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 カ年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 カ年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ・大学院アンケート ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

2021 年度大学院生アンケート結果は、回収率が他の研究科と比べて最も高く、82.4%であった。また、Q1 を除き、各項目に対する評価は高いと判断される。

【成果が上がっている点】

2021 年度大学院生アンケート結果については、家政学研究科博士前期課程と博士後期課程を合わせて学生 17 名中 14 名から回答が得られ、全研究科中で最も回収率（82.4%）が高かった。施設・設備等を除き、教育の質に関する項目をみると、「Q2 授業レベル」「Q4 履修指導の評価」「Q9 授業に対する教員の熱意」「Q10 教員の研究指導」「Q15 満足度」については回答 3, 4（やや・大変当てはまる）の合計が 100%であり、2021 年度もコロナ禍であったが、高評価が得られた。少人数であることから、対面授業とオンライン授業を適宜組み合わせ、感染予防をしながら指導したことが高評価につながったと考えられる。

【課題となっている点】

大学院生の履修に関連する満足度として、研究科での学びが「Q15 自分のためになった」と肯定的な評価が 100%を占めたが、「Q1 授業の内容が期待していた通りであった」についての回答は、2020 年度の 34.8%から 28.6%に低下していた。前述のように、教員の履修指導や研究指導、教員の熱意は院生に届いているようであるが、この項目の低下している理由が不明である。これについては原因を究明する必要があると思われる。

担当部局

生活造形学専攻

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・成績分布（G P A ・得点）（科目群別・3 カ年） ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 家政学研究科生活造形学専攻では、専門科目における受講生が1～4名と少人数であることから、シラバスに基づいた成績評価を適切に行うと共に、授業時における院生の発表と質疑応答、レポート提出におけるフィードバックを適切に実施している。

(イ) 家政学研究科生活造形学専攻では、受講生が1～4名と少人数であることから、成績分布に偏りがないように評価することは難しい。院生の評価については、絶対評価で適切に行っている。

【成果が上がっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし。

(イ) 特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし。

(イ) 特筆すべき事項なし。

評価項目 4	(ア) カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 (イ) 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・授業担当一覧 ・科目群別非常勤比率（3 カ年程度） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 大学院生に広い視野をもたせるための授業「生活造形学特別講義 A および B」のみ非常勤講師を置いている。その他の主要な科目等すべてを専任教員が担当しており、専任教員の配置は適切であるといえる。

担当部局

生活造形学専攻

（イ）上記の通り、家政学研究科生活造形学専攻では非常勤比率 3.0%であり、他専攻と比較しても非常に低い。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし。

（イ）特筆すべき事項なし。

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

家政学研究科生活造形学専攻では、造形意匠(デザイン)学、アパレル造形学、空間造形学の 3 研究領域から構成されるため、異なる研究領域間での研究指導方法を学ぶ機会を設けている。博士前期課程における専攻内修士論文の中間発表（あるいは事前発表）・最終発表、博士後期課程における博士論文の中間発表（あるいは事前発表）・公聴会に、専攻あるいは研究科の全教員が出席し、意見交換を行っている。教員各自の研究指導方法を見直し、教育の質的向上および改善に資することを目的として、異分野の研究発表を聴く機会を複数回設けている。

【成果が上がっている点】

造形意匠(デザイン)学、アパレル造形学、空間造形学の 3 研究領域で異なる専門分野の教員が意見交換を行うことで、教育・研究内容の質的向上・改善が行われている。

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし。

担当部局

生活造形学専攻

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・教員組織編制方針 ・専任教員の状況 ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 教員組織の職位は、2021 年度において教授 9 名（教授(契約)4 名を含む）、准教授 5 名となっている。男女比は、50/50 となっておりバランスが保たれている。年齢構成については、大学院有資格者の関係で教授(契約)多く、やや高齢側に偏っている。しかし、今後の人事計画において、新規採用教員枠を講師や助教とする見込みである。

(イ) 大学院博士前期課程指導教員 11 名、授業担当教員 3 名、博士後期課程の指導教員 5 名、指導補助教員 2 名となっており、カリキュラム上あるいは研究指導上、適切な教員組織となっている。

【成果が上がっている点】

(ア) 新規採用教員枠については助教、講師、准教授も含めた若年層に広げて募集を実施する計画である。

(イ) 生活造形専攻内で、適切な大学院指導資格審査を行い、カリキュラムに基づく教員組織となっている。

【課題となっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし。

(イ) 特筆すべき事項なし。

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

家政学研究科生活造形学専攻の 2018-2022 の入学者定員充足率平均は、56.7%であり、常に欠員が生じている状況にある。抜本的な大学院改革を行い、改善する必要がある。なお、教育や教員配置については問題はない。学生アンケート数は、14/17 人と絶対数が少ないことから確定的なことはいえないが、各項目ともに概ね評価は高く、問題は見出されない。